

二〇一六年の流行語として、オックスフォード英語辞典が〈ポスト真実 post-truth〉を選んだことが話題になった。「客観的事実が、感情や個人的信念に訴えるものより影響力を持たない」ことを意味するその言葉は、政治家が事実を反する主張で票を集めたり、SNSで不確かな情報や虚構のニュース記事が真実として広まったりする昨今の状況を象徴するものとして評価されたという。

マスコミによる情報精査がうまく機能せず、ある人がデマ¹¹創作物として流した情報が、SNSなどを介して誰かにとつての現実となり、その人たちの行動を左右し、大きく社会を変えていく。あるいは誰かにとつて現実と感じられていることが、ある人にとつては下らぬ冗談としてしか知覚できない——こうした、フィクションと現実認識がたやすく転換していつてしまう事態は、昨年が、VR元年と呼ばれる年であったこと、あるいは人工知能による創作や、シンギュラリティ以後の人間というものが盛んに議論された年であったことも、どこかで共鳴するのもかもしれない。VRではしばしば、仮想空間の中にスムーズに没入することが目指される。自分の体験がフィクションナルものであるという認識が、仮想空間と相互作用するなかで失われていく……そうして現れる〈現実〉は、「実際にあったこと」や「厳密な論理で導出されるもの」といった定義とは別の何かを感じさせるだろう。

そもそも多くの芸術は、作品を創作あるいは享受する営みにおいて、現実とフィクションの区分を大きく揺らがせてきた。たとえば大江健三郎は、書き手としての自らを取り巻く現実を、小説のなかに如実に反映しつつ、あえてそこにあからさまなフィクションを混ぜ込んでいった結果、「そのどれが事実にくくし、どれがそうでないかの見わけがつかなくなった」と語っている(『私という小説家の作り方』)。また、石牟礼道子『苦海浄土』は、水俣病をめぐる、取材と想像の入り混じったテキストであることが知られている。こうした作家たちの作品では、現実と虚構と自己の相互作用の中から、そのいずれにも属さない(大江の言葉を借りれば)〈本当のこと〉を浮かび上がらせることが目指されていたのではないだろうか。

社会そのものが、特権的なひとつの現実を失い、無数の相容れない現実認識たちの錯綜する(ポスト真実)的状況にあるとされる現在において、フィクションというものの定義は、どのように変わり、あるいは変わらないのか。そして、人工知能による創作やシンギュラリティ以後の人間、あるいはブロックチェーンによる中央集権的構造の解体などを考慮するならば、今後、人間(個人¹²わたし)によるフィクションナルものの制作は、あらためて誰のために、どのような意味や手段をもって続けられるのだろうか。(山本)

「文学」がつねに、そのモチーフにおいて、あるいはその表現手段において、虚構と現実のあわいを漂ってきたことは言うまでもない。違う言い方をすれば、あらゆる虚構と現実のあいとは、ときに(とある場所では)「文学的」なる呼び名を冠されてもきた想像力の生息する場でもあって、それを別の名前で呼んでも構わなかったし今後そう呼んでも構わないことも、あらためて言いつのこともない。

「真実」や「事実」などもとよりなく、あるいは自分が真実や事実と信じたものがそうではない(かもしれない)と他の誰かや自分自身によって明らかにされたとき、そこで生じる戸惑いや苦しみや歓びや驚きを記述することや、いまここではない時間や場所への想像力をはばたかせること(を肯定すること)——そうした試みの結果としての「(かつて)フィクション(と呼ばれたもの)」の未来をめぐって、私たちは考えてゆくことになる。

武田将明氏をはじめとする「世界文学の時代におけるフィクションの役割に関する総合的研究」(科学研究費基盤B)の主催した「人文研アカデミー 文学カフェ」現代フィクションの条件』を一方の発端に、また、今年で没後二五年を迎える中上健次のかつて著した虚構の再虚構化に挑んだ中上紀氏の中篇「天狗の回路」をもう一方の発端として、若干二四歳の山本浩貴によって編まれたこの特集が、近い未来の「文学」と呼ばれるかもしれないし、そうでないかもしれない(にか)の扉を、多様な年齢と興味を持つ読者諸氏とともに開かんことを。(市川)